北九州に大学院を創る

秋月（あきづき）　影雄（かげお）
電気学会 元会長／早稲田大学大学院情報生産システム研究科委員長

新しい年を迎えたが，日本の景気はまだ好転しそうもない。少子化は進むであろうし，若い人達は楽をして楽しく暮して生きたいという志向が強い。こんな時代に，厳しい教育をし将来日本の技術を背負う人材を育成する大学院を北九州に設立することとなった。

話の発端は，日本有数の工業地帯であった北九州が近年生産拠点の海外移転に伴って衰退の方向にあり，この地域の再生を目指してハブポートや国際空港の開設などインフラの充実を図る一方，この地をアジアの頭脳集団の集積地とすべく学術研究都市を開く計画を立てたことにある。具体的には北九州折尾駅から車で15分ほどの地に山林を切り開いて学術研究都市内の大学ゾーン（35 ha）を設定した。そこに北九州市立大学が新たに理工系の国際環境工学部と大学院国際環境工学研究科を，九州工業大学が大学院生命工学研究科，福岡大学が大学院工学研究科内の資源循環・環境化学専攻を開設し，さらに2003年4月早稲田大学が大学院情報生産システム研究科を新設した。北九州市は(財)北九州産業学術推進機構（FAIS）をこの大学ゾーン内に設け，上記の市立大学，国立大学，私立大学という異なる形態の大学・大学院を集めて競合と協力による発展を試みている。

私は数年前から早稲田大学進出の計画に携わることとなり，現在責任者として北九州に単身赴任して運営に当たっている。北九州に頭脳集団をつくる目標に対して，早稲田大学としては高度の教育を受けた技術者を増やし全体的にレベルを上げることと，ボーダレス化した生産に対応するために広く国外からの学生も受け入れた国際化された教育と研究の場をつくることを目指した。そのために一学年200名という一研究科一専攻としては大規模な独立大学院を設立することとした。これは大学院は広く勉学の意志のある者が入学でき，厳しく学ばせるところであるべきだという基本方針に基づいている。そのために，入学試験では面接を重視し，志願者の目標と本研究科の方針と一致した学習能力のある者を選抜するようにしている。

この研究科の内容は，情報アーキテクチャ，生産システム，システムLSIの3分野を融合した体制としている。すなわち，情報分野とシステムLSI分野で情報工学をソフト・ハードの両面から対象とするとともに，情報を駆使する21世紀の生産システムにかかわる人材育成を目指している。特徴として，システムLSI設計という限られた分野に10人の教員を配置して北九州にこの分野の基盤をつくることと，生産と情報を結びつけた生産情報分野を設け，経済や商学を学んだ文系の学生も受け入れていることなどが挙げられる。

その他，教育プログラムにも新しい試みを取り入れた。本研究科において最新の知識を得ることを目指す受講型と先端の研究活動を行うことを目指す研究型の両者に対応できるように学習標準パターンを設定したのもその一例である。

現在初年度入学生として，185名の学生が在籍している。そのうち博士後期課程53名，留学生56名と大きな割合を占めていることは，我々が目標とする高度技術者の育成，国際化の方向に合致していると言えるであろう。また，文部科学省よりシステムLSIの人材育成プログラムとして大きな資金獲得ができたことも本研究科が評価された結果と思っている。

北九州市の支援により立派な建物を建てていただいた(下の写真)。昼夜・休日にも多くの学生が研究に励んでいる。しかし，この研究科の設立に携わって考えさせられたことも多い。説明会を開催した時，偶然隣の部屋ではタレントの新人募集をしていたが，黄色の髪に耳に飾りを沢山つけた若者が次々と集ってきていた。本研究科の説明会には10名余り。日本はこれからどうなっていくのだろうか。